

小学校入学時における発達障害児をもつ母親の適応に関する研究 —連絡帳の分析を通して—

小 西 一 博*・稲 垣 応 顕**・松 井 理 納***

(平成22年9月28日受付；平成22年11月2日受理)

要 旨

本研究では、障害のある子どもに対して積極的にかかわろうとする、他の子どもの実態や接触理由を数量的観点から把握することと、彼らをもつ障害のある子どもに対する主観的な認識を検討した。

その結果、障害児に対して積極的にかかわりをもった子どもの実態として、 χ^2 検定によってきょうだいがいることと、学力が中程度であることが示唆された。一方、有意差は認められなかったものの、百分率から同じ保育所出身者で年下のきょうだいをもつ女兒が多いことが窺われた。また、交友選択の理由では対健常児と同様に「かわいいから」とか「好きだから」という好感が大半を占めながらも、対障害児特有の「援助・優越」という向社会的行動に帰属した理由も挙げられた。

さらに、彼らは障害児に対してポジティブなイメージをもち、具体的には明るい、楽しいと捉えている。また、彼らは障害児に対する心理的距離も近く、一緒に遊んだり勉強したりと向社会的行動が求められる場面に対しても積極的な態度をとろうとしていることが窺われた。

KEY WORDS

連絡帳 小学校入学 発達障害児

1. 問題と目的

人生において、出来事や移動によって環境が変わることは誰しもが経験することである。異なる環境への移行は、新しい環境へうまく適応できるか、あるいは適応に失敗して何らかの不都合な事態を引き起こしてしまうかの分岐点であり、危機的 (critical) であるといえる (山本, 1990)。小学校入学に伴う環境移行に関しても同様である。このような環境移行は、子どもにこれからの小学校生活への期待と不安を抱かせるだろう。子どもの小学校環境への適応を捉える場合、その母親の新環境の適応状況を調べることも重要である。母親の新環境適応状況は、子どもの行動に鋭敏に反映され、同時に子どもの行動は母親の意識、態度、行動に影響を及ぼすと思われるからである。小学校入学前後において、当該の子どもだけではなく、その母親も新環境適応において様々なインパクトを受けることになると思われた。その母親の心理を微視的に捉える手法として自由記述を用いた先行研究として山本・石井・古川 (1980) の報告がある。

山本・石井・古川 (1980) は、新入生の母親に対して家庭と学校の連絡のために小学校で使われた連絡帳の分析を行っている。その結果、入学直後には学校に関する記述がポジティブなものもネガティブなものも含めて多くみられるが、5月末までには時間の経過につれて徐々に減少した。このことについて、山本・石井・古川 (1980) は移行主体が新環境に対して感じる新奇性の減少ということから説明づけている。つまり、子どもが入学した当初には、母親は学校に対して強い新奇性を感じており、学校に対する数々の事柄に関する注意が覚醒され、そのために連絡帳への記述も多くなったが、新環境についての知識が実際に学校に出かけたり、子どもや教師から学校のことを聞いたりすることが増加するにつれて、学校に対する新奇性が減少し、徐々に連絡帳への記述も減少してきたと解釈している。

このように通常の学級に子どもが入級する母親の心理については研究がなされている一方で、特別支援学級に子どもが入級する母親を対象にした研究は、先行研究を概観する限り見受けられなかった。推論の域ではあるが、子どもが特別支援学級に入級する母親は、子どもが通常の学級に入級する母親よりも、多くの緊張や不安を抱えているのではないかと思われた。ましてやその子どもが第一子の場合には、より強い移行体験をすることになり、様々な感情をもつことになるだろう。また、学校教育現場に携わる立場からすると、この危機的状況をいずれ適応していくだろうと、ただ静観するのではなく、むしろ積極的に教育的介入によって母親をサポートする必要があると思われた。

そこで、本研究では小学校に入学する発達障害のある第一子をもつ母親が、新環境である小学校にどのように適応

していくかを連絡帳への記述量や内容を通して検討し、その結果に教育的介入のための基礎的な資料を得ることを目的とする。

なお、本研究は調査研究として被験者総数が少ないものの、①同条件の被験者が確保されたこと（入学する小学校や学級担任などが同一であること）、②第一子に発達障害のある子どもを小学校に入学させるという事態を経験する母親を対象にした先行研究がないこと、を理由として分析を継続し、研究として提示することにした。

2. 方法

2. 1 対象者

X年4月にA県内のB小学校に入学し、特別支援学級（知的障害児学級）に入級した新入生（男子1名、女子1名）の母親2名。仮にこの2名をC・Dと呼称する。Cは36歳の専業主婦で、夫は自営業である。自閉症を有する新入学児の長男（6歳）、双子の長女（6歳）、次男（1歳）の3児をもち、祖父母を含めて7人家族であった。また、Dは35歳で、夫と同じ会社に勤めている。新入生であるダウン症候群の長女（6歳）、および次女（3歳）の2児をもち、祖母を含め5人家族である。

C・Dに共通する点としては、両者とも経済的社会的地位は中流以上の家庭であり、第一子である中度の知的障害（療育手帳のB判定）を有する子どもを入学させるという事態を経験することであった。また、相違点としては新入児の性別が違うこと、及びDの家庭が両親共働きであるということがあった。

2. 2 調査用紙

学校と家庭の「連絡帳」を調査用紙として代用した。「連絡帳」には罫線のみが引かれており、教師と母親との双方が連絡する事柄を自由に記入できるようになった市販されている一般的なノートを使った。

2. 3 手続き

連絡帳は、特別支援学級の担任である筆者（以下、教師と記す）を通じて子どもに手渡された。子どもは連絡帳を毎日家庭に持ち帰り、家庭において母親がこれに記入し、翌日学校に持ってきて教師の点検を受けた。この連絡帳への記入は入学日から行われた。

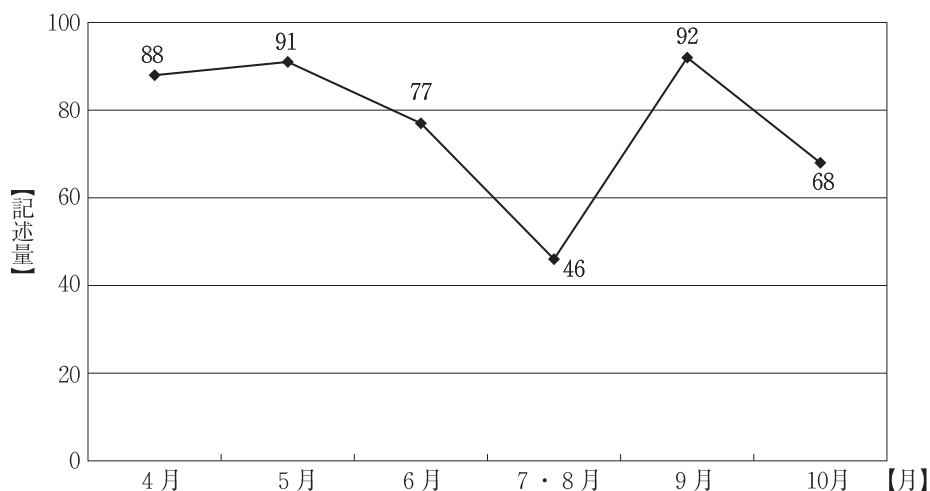


Figure 1 連絡帳に書かれた記述量の変化

2. 4 分析方法

本研究では、4月から10月までの母親の記述を使用し、各月ごとの6期に分けて分析した。なお、7月と8月においては他の月よりも出席日数が少ないことから、二月間を合わせて集計し、他の月間との誤差を調整した。

次に、各対象者の記述を1文1反応とし、この反応を第二筆者と共に分類し、カテゴリを作成した。同様に、反応に含まれる感情の解釈においても、協議して好意的記述、非好意的記述、及びどちらとも言えない中性的記述に分類した。

3. 結果と考察

3. 1 連絡帳の記述量の変化

連絡帳の記述量の変化をFigure 1 に示した。4 月は88反応と全体の平均反応数を上回った。そして、5 月にはやや増加して91反応と、記述量が1 学期での最高値を示した。この結果から、4 月は子どもを初めて小学校に入学させたということで全てが新奇であるため、母親は連絡帳を通して教師と情報交換を行い、新奇性を低減させようとしている心理が窺われた。さらに、5 月になるとその思いはさらに増え、心理的に不安定になり、母親にとって危機的状態になることが推察された。

しかし、6 月になると77反応に減り始め、7・8 月には46反応にまで減少し、7・8 月の反応数は各月の中で最低値を示した。このことから、入学から約3 ヶ月後には母親の心理状態が落ち着き始めることが窺われた。母親ではなく、中学校入学や転校のした生徒を対象にした研究では、両事態に共通して約3 ヶ月（4～6 月）が新環境との相互交流が最も活発に行われ、それ以後に安定期を迎えることが示されているが（小泉，1997），本研究も同様な結果が得られた。母親と子どもの関連は検証されてはいないが、子どもが心理的に落ち着き始めることによって、母親が影響を受けて安定し始めたのではないかと推察された。

連絡帳の記述量はそのまま減少していくことはなく、夏季休業が終わった9 月には92反応と記述量が増え、最大値を示した。この値は7・8 月の2 倍に及んだ。つまり、最小値から最大値まで急激に増加したことになる。このことから、母親にとっては4 月の入学時以上に心理的に不安定になることが窺われた。筆者らの小学校での勤務また臨床経験から捉えると、通常の学級に在籍する小学校1 年生においては夏季休業中に自宅で過ごす時間が増え、母親とのかかわる時間が増えるため、今までできていた身辺処理ができなくなる、つまり入学前の発達段階に退行してしまう傾向を感じていた。したがって、学校生活から離れることにより特別支援学級に在籍する子どもにおいても少なからず、入学前と同じような生活態度に戻ってしまっている可能性は否めない。そのため、9 月になると、母親は子どもが久しぶりの学校生活のリズムを取り戻すことができるだろうかと一抹の不安を抱くのではないかと推察された。

そして、10 月にはその思いが解消されるかのように、記述量が68反応と再び減少した。1 学期のピークであった5 月から6 月までの下げ幅よりも2 学期の9 月から10 月までの下げ幅の方が大きかった。この結果から、1 学期の経験が生かされている、つまり、子どもが落ち着きを取り戻すことや母親自身が心理的混乱を一度体験しているため、速やかに平常な状態に戻すことができたと思われる。

以上のことから母親の心理的適応は、入学当初から2 ヶ月間にわたって新環境に関する注意が覚醒され、心理的な高揚がみられる段階から、次第に落ち着きを取り戻して適応レベルの安定さがみられる段階、夏季休業を機に再び心理的不安定さが増幅する段階、徐々にそれが回復して適応レベルが進む段階を経るという「U 字型（アルファベットの小文字「v」の筆記体）」を描きながら適応していく過程が窺われた。

3. 2 連絡帳の記述内容の分析

3. 2. 1 記述内容の分類と変化

連絡帳に記述された内容を分類したところ、「連絡（66%）」・「質問（9%）」・「感謝（8%）」・「依頼（7%）」・「忘れ物（5%）」・「謝り（3%）」・「悩み・願い（2%）」に分けられた（Figure 2）。

本研究では、連絡帳を調査用紙として使用しているため、比率としては必然的に「連絡」が高比率を示した。次に、「質問」が全体の10%弱を占め、連絡帳を通して新環境である小学校についての知識を増やそうとする母親の心理が窺われた。次いで、「感謝」の比率が多かった。筆者は、通常の学級に在籍する子どもの母親よりも、発達障害のある子どもの母親として、なおさら特別な支援を求める要望や願いを抱くことが多いのではないかと予想していたが、本研究では「依頼」よりも「感謝」の方が比率的に高かった。この結果から、我が子に対して通常の学級に在籍する子ども以上に個別の対応をしてもらっていることに母親が感謝の念を抱いているのではないかと推察された。

一方、最も比率が低かったカテゴリは「悩み・願い」であった。笠原（1999）によると、幼稚園や保育所に子どもが在籍する母親208名を対象にした調査で、母親は子どもを預かってくれる場として保育者を捉えているが、保育者

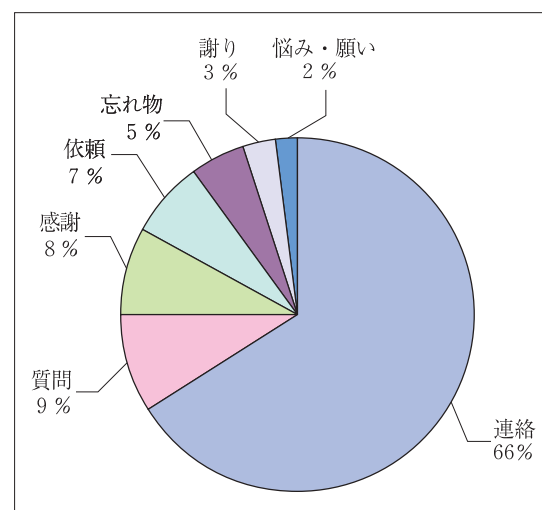


Figure 2 連絡帳の記述内容の分類

を相談相手としてとらえない傾向を示唆している。この報告は幼稚園や保育所に子どもを預けている母親を対象にした研究ではあるため、あくまで推測の域を出ていないが、小学校1年生の母親の心理にも少なからず類似する点はあると思われた。

連絡帳の記述内容の変化をFigure 3に示した。「連絡」の推移では徐々に増えていく傾向がみられたが、7・8月のみ「連絡」が減少した。その要因として7月に入ると子どもが教師に慣れ、また教師も子どもの実態をおおよそ理解してくれたと母親が判断したために記述量が減ったと考えられた。しかし、2学期が始まると連絡帳の記述量の変化で考察したように、心理的に不安定な時期を迎えるために教師へ伝えたい事柄が多くなったと推察された。

また、「連絡」以外のカテゴリは全体的に10%以下で推移し、特記すべき傾向はみられなかったが、その中でも「質問」が5月と7・8月に15%程度までの上昇がみられた。その具体的な内容をみると、4月では授業に関する事柄が主な質問であったが、5月では授業に直接的に関係のない細かな事柄（例えば、「注文したエプロンは、届きましたか」、「水筒はまだ持たせるのですか」）などが多くみられ、7・8月は夏季休業中に関する事柄（「登校日に内履きは必要ですか」、「夏休みの宿題は全部するのですか」）などが主な内容だった。

以上のことから、4月に連絡帳などを通して学校での授業の様子について凡そ理解できたため、5月は授業以外の身の周りのことに関心事が移っていったと推察された。また、7・8月においては母親が初めて経験する夏季休業に向けて確認しておきたいことが増えたと考えられた。

3. 2. 2 肯定的感情と否定的感情に関する記述の変化

まず、連絡帳の記述に含まれている感情を解釈して、肯定的感情に関する記述・否定的感情に関する記述・中性的感情に関する記述（以下、それぞれを肯定的感情・否定的感情・中性的感情と略記する）に三分し、その推移を分析した（Figure 4）。

中性的感情は全体の70%台まで増加したり、50%台まで減少したりと隔月ごとに変動するが、2学期になってから約60%で推移した。また、4月から6月にかけて肯定的感情が否定的感情を上回って推移するが、7・8月から9月まで逆転し、否定的感情の方が多くなった。ところが、10月に再度、肯定的感情が上回るという変化が認められた。

この結果から、母親の心理状態がポジティブからネガティブになり、最終的にポジティブになるという過程を経ることが窺われた。この結果においても前述と同様に、夏季休業中という期間が影響を及ぼしたと思われた。つまり、子どもが学校よりも家庭で過ごす時間が増えるために、母親はそのことに対してネガティブになることが窺われた。

次に、肯定的感情と否定的感情に向けられた対象をさらに分類に加え、教師への肯定的感情と否定的感情・子どもへの肯定的感情と否定的感情の四分にして、その推移を分析した（Figure 5）。

教師への感情では、肯定的感情がW字型、否定的感情が緩やかなS字型を描きながら推移した。全体的に教師への感情は肯定的なものが否定的なものを上回って推移したが、7・8月のみ逆転し、否定的なものが比率として上回った。

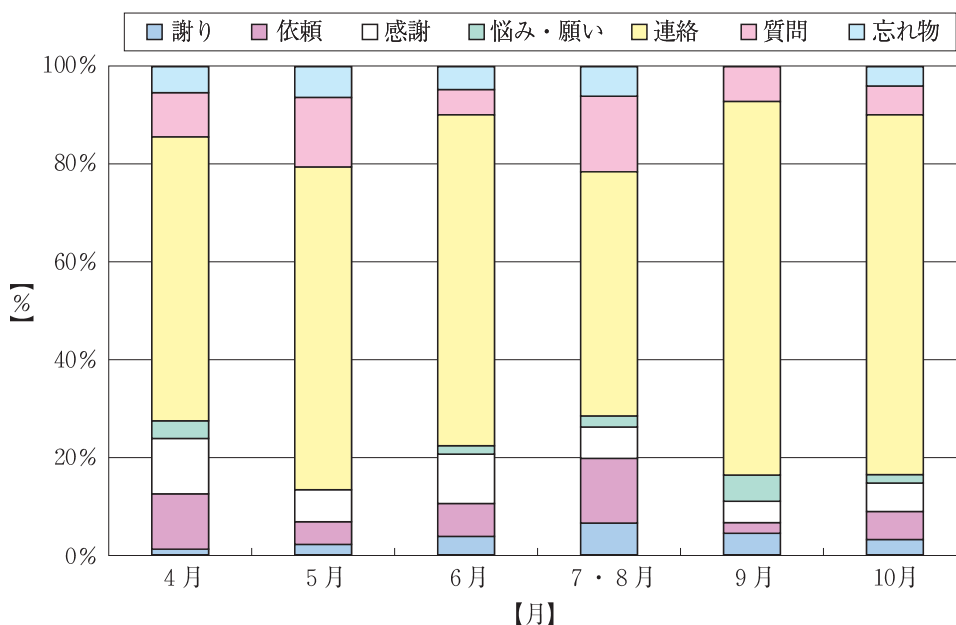


Figure 3 連絡帳の記述内容の変化

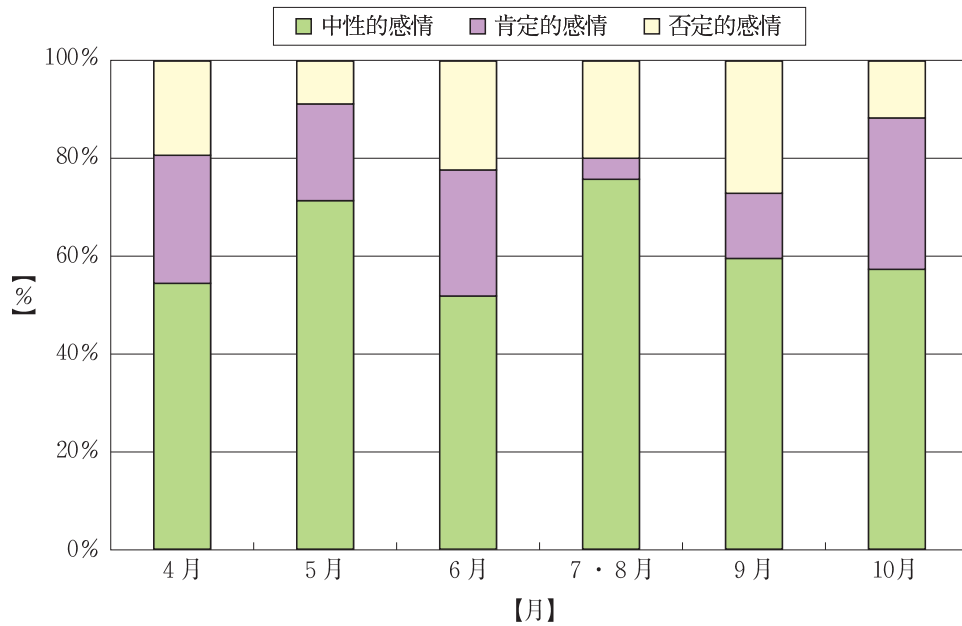


Figure 4 母親が抱く感情における比率の変化

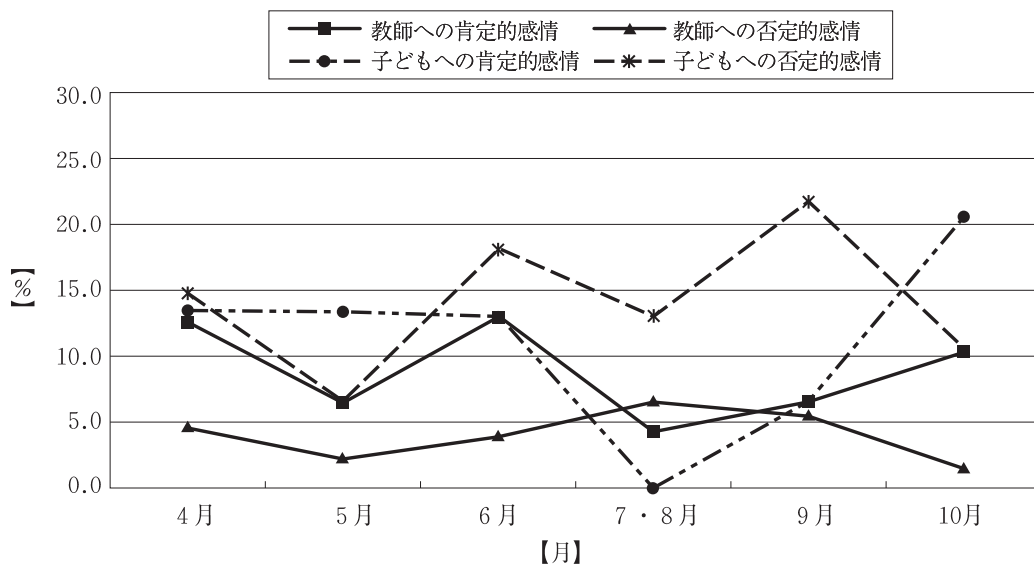


Figure 5 母親が抱く対教師・対子どもへの感情の変化

具体的には、7・8月の教師への否定的感情では、「提出期限に間に合わない夏休みの宿題がありますので、遅れて出します」とか「個別懇談会では大変ご迷惑をおかけしました」などが挙げられ、一方、教師への肯定的感情では、「1学期間、子どものペースに合わせて授業をしていただき、ありがとうございます」などが挙げられた。このことから、記述はこの時期特有の内容であり、教師への感謝の思いがあるものの、教師に迷惑をかけてしまったという罪悪感を抱きやすい時期であり、母親はネガティブになりやすいことが窺われた。

子どもへの感情では、肯定的感情がV字型、否定的感情が隔月ごとに増加と減少を交互に繰り返す動きを描きながら推移した。全体的に子どもへの感情も肯定的なものが否定的なものを上回って推移したが、5月と10月のみ逆転し、否定的なものが比率として上回った。このことから、学期が始まった翌月、つまり、学校生活に慣れ始めた時期に子どもへの肯定的感情よりも否定的感情の方が高まることが示唆された。

具体的に両群を比較すると、子どもへの否定的感情は変動しながら9月にピークを迎え、さらに子どもへの肯定的

感情との比率差が最大になることから、子どもへの否定的感情は安定することなく、絶えず揺れ動いているが、夏季休業明けの9月に最も子どもに対してネガティブになることが窺われた。しかし、その翌月には子どもへの肯定的感情が最大比を示したことから、母親は一時的にネガティブになるが、すぐに心理的に回復することが推察された。

以上の4つの項目に共通する点として、4月から5月にかけて全てにおいて、割合が低くなり下降線を描いた点である。このことから、母親は入学当初は新奇性のある新環境に対して多くの感情や思いを抱くが、母親自身が次第に学校の様子を知り、子どもも学校生活に慣れてきたと感じられると、子どもや教師への感情表出が一時的に低下することが窺われた。

4. 総合考察

小学校に入学する発達障害のある第一子をもつ母親が、新環境である小学校に適応していく様相を連絡帳への記述量から検討した結果、母親が心理的に不安定になる時期は4・5月と9・10月の二期であることが示唆された。

4・5月は、新環境である小学校に対して母親は学校に対して強い新奇性を感じており、学校に対する数々の事柄に関する注意が覚醒され、特に5月においては連絡帳を通しての質問事項が多くなると考察された。母親の新環境についての知識は実際に学校に出かけたり、教師から学校のことを聞いたりすることによって増加し、学校に対する新奇性が減少すると思われた。それに伴い、徐々に連絡帳への記述も減少していった。しかし、夏季休業後に母親は子どもが久しぶりの学校生活のリズムを取り戻すことができるだろうかと一抹の不安を抱いたために、連絡帳への記述量が増加したと推察された。

一方、母親が不安定になると予想された二期以外にも7・8月においても注意を要する時期であることが推察された。その要因として、1学期を振り返って子どものことで教師に迷惑をかけてしまったという罪悪感を抱いたり、夏季休業中での子どもとのかかわり方に不安を抱いたりする傾向が窺われた。

以上のことから、特別支援学級の担任は、特に各学期の初め頃に母親へのサポートが必要であると考えられた。特別支援学級の担任は今まで以上に母親との情報交換を行い、連携を密にしていく必要性が示唆された。また、夏季休業前には、母親にその期間の過ごし方を説明したり、母親が特別支援学級の担任に子どものことで気を遣ったり、気兼ねしてしまう気持ちに寄り添って、その感情を受け止めてあげるカウンセリング的なかかわりが求められると思われた。また、夏季休業中の生活について心配に感じていることについて相談に応じたりして不安感を軽減するようなサポートが重要であると推察された。さらに、夏季休業中においても家庭を訪問したり電話をかけたりして関係を切らすことなく、母親を心理的に援助していくことが望まれるだろう。

5. 今後の課題

本研究では、母親と教師との関係性が影響したと思われた。一般的に母親と教師は連絡帳を媒介として連絡し合うことが主であり、特別な事情がない限り、電話をかけ合うことはない。ましてや、直接顔を合わせて話をするなどとは殆どない。しかし、本研究での教師が母親に登下校の付き添いを依頼してあったこともあり、毎日直接会話をする機会があり、その時にデジタルカメラで撮影した動画や静止画で見せながら学校での子どもの様子を説明した。また、「〇〇さん通信」というA4一枚程度の新聞を毎日発行し、詳細に伝えていた。このような積極的な母親への働きかけは、教師との信頼関係のより強固なものへ促進したと思われた。したがって、本研究は一般的な特別支援学級の担任以上に親密な関係で行われた特異な連絡帳であったと言えるだろう。連絡帳の内容分類では、子どもへの「悩み・願い」の記述が比率的に最も少なかったが、連絡帳を介さずに口頭でなされることも多かった。よって、本研究の結果はそのまま他校で行われている連絡帳に当てはめ、一般化することは難しいと考えられた。さらには、子どもの障害の種類やレベルの程度などによっても連絡帳への記述内容が異なってくることも有り得るだろう。

今後は障害のある子どもを小学校に入学させる事態を経験する母親である対象者総数を増やした横断的研究により、一般的傾向を捉える検討が必要になると思われた。

文 献

- 笠原正洋 1999 育児相談に於いて保護者がとらえる保育者の対応について 中村学園研究紀要 31 21-27
 小泉令三 1997 小・中学校での環境移行事態における児童・生徒の適応過程—中学校入学・転校を中心として— 風間書房
 山本多喜司・石井眞治・古川雅文 1980 環境認知の微視発生的発達に関する研究 (4) 広島大学教育学部紀要第1部 29 145-153
 山本和郎 1990 臨床心理学的地域援助 上里一郎・鏑幹八郎・前田重治(編) 臨床心理学体系第8巻 心理療法2 金子書房

Adjustment of the Mother Who have Children with Developmental Disorder When entering an Elementary School

—Through the Analysis of the Booklet—

Kazuhiro KONISHI* • Masaaki INAGAKI** • Yoshino MATSUI***

ABSTRACT

This study aims to observe two mothers whose first-born child had a developmental disorder and to analyze how they adapted to a new environment during their children's first grade schooling. Their message notebooks (*Renraku-cho*) were studied as a source for quantitative and qualitative analyses.

Results of quantitative analysis show that the text written by both mothers increased in volume during the following two periods: April/May and September/October, and then decreased during the other months.

The content of the text was also studied through a qualitative analysis. The results suggest that both mothers contacted the teachers and administrators, voiced their concerns, and reported the situations of their children, particularly during the above-mentioned periods, and reported ordinary school matters during the other months.

Based on these analyses, it can be assumed that the mothers became psychologically unstable when experiencing a new, unique environment during the months of April/May and September/October.

KEY WORDS

booklet, children with developmental disorder, elementary school entrance

* Komadori Special Support School

**School Education

***Educational Center of Kashiwazaki City